

# 西国巡礼 —その歴史と信仰— The Saigoku Pilgrimage of the Kinki District - History and Beliefs

北 川 央 (大阪城天守閣)  
Hiroshi KITAGAWA

The Saigoku Pilgrimage (The 33 Temples of the Kinki District), along with the Shikoku Pilgrimage (The 88 Temples of Shikoku), is representative of pilgrimages in Japan. Unlike the Shikoku Pilgrimage, however, which is an example of the type of pilgrimage in which sites associated with the founder of a sect are visited, the Saigoku Pilgrimage falls within the category of pilgrimages to worship the principle images of temples. The current lineup of thirty-three temples had already appeared by the end of the 11th century to the beginning of the 12th century. During its early stages the pilgrimage was undertaken as an ascetic practice by priests of the Tendaijimon sect, but from the mid to late 15th century it became popularized, and the current list of temples was established, with the name "Saigoku" attached to it. In addition to this actual history of the Saigoku Pilgrimage, a narrative of its origins has also been passed down. According to it, the pilgrimage to the thirty-three temples to worship the image of Kannon was begun during the Yōrō era (717-724), when Saint Tokudō was instructed by Enma, ruler of the realm of the dead, to make the pilgrimage as a way to avoid falling into hell and to be reborn in paradise. It is said that Emperor Kazan revived the practice in the Kanna era (985-987). Beliefs based on this legend can still be seen clearly today, even in current funeral practices, in which hymns in praise of the thirty-three temples are chanted and a pilgrim's jacket, scroll, and record of temples marked with red seals of the thirty-three temples are placed in the casket with the body, in order to ensure rebirth in paradise. In addition, many of the people who make the Saigoku Pilgrimage also visit unlisted temples such as Shitennōji and Zenkōji because they also are connected with the belief in avoiding hell and being reborn in paradise. The true nature of the Pilgrimage as a form of religious faith among the common people lies in this desire for salvation from hell.

## 1. 西国巡礼と四国遍路 —近年の動向—

筆者は大阪府松原市に生まれ育ち、今もそこに住んでいるのであるが、この松原市に隣接する藤井寺市に西国三十三ヶ所（以下、西国巡礼）の第五番札所葛井寺がある。幼い頃から何度も参拝に訪れたが、巡礼に興味・関心を持ち、西国巡礼の五番札所であると意識して訪ねたのは昭和49年3月が初めてで、それ以降、西国巡礼に限らず、各種巡礼の札所を訪ねるようになり、同年7月には屋島寺（84番）・八栗寺（85番）・金倉寺（76番）・善通寺（75番）など、香川県下の四国八十八ヶ所（以下、四国遍路）の札所もいくつか参拝した。

30数年前に西国・四国の札所をまわった際には、多くの巡礼者が訪れる西国巡礼の札所に対して、四国遍路の方はいずれの札所もほんとうに閑散としていてお遍路さんの姿もほとんどなく、大都市近郊で、休日を利用したマイカー巡礼が盛んな西国巡礼は、宗教離れがさらに顕著になる将来においても、ひとつのレクリエーションとして生き延びるであろうが、都心から離れて展開する四国遍路の方は次第に訪れる人もなくなり、これから益々廃れるのではないかとの印象を強く持った<sup>(註1)</sup>。ところが私の予想はもの見事にはずれ、現在では四国遍路の方が圧倒的に人気が高く、いつ訪れても各札所には多くのお遍路さんが満ち溢れているのに比べ、西国巡礼の方は巡礼者の姿はまばらで、はるかに少なくなっている。

このことは単に私の感想だけでなく、数字の上からもはっきりと裏付けられている。佐藤久光の『遍路と巡礼の社会学』<sup>(註2)</sup>によれば、西国巡礼は昭和44年には約3万人の巡礼者があり、昭和50年代から平成10年頃までは7万人前後で推移したのに、以後は次第に減少し、平成14年には5万4千人にまで落ち込んでいる。

一方、四国遍路の方は、昭和44年には1万4千人程度に過ぎなかったものが、昭和54年には3万人を突破し、以後はどんどん増え続け、平成14年に8万2千人を記録している。明らかに西国巡礼と四国遍路の間で逆転現象が生じたわけである。

30数年前、筆者は、大都市近郊に展開することが、西国巡礼にとってはプラス要因であり、四国遍路の場合は、都会から離れた立地がマイナス要因であると考えた。しかし現在では、「癒し」という言葉で端的に表現されるように、都会では既に失われてしまった自然環境や歴史的・文化的景観、また人と人との温かい交流や安らぎを求めて、巡礼の旅に出る人が多くなった。そういう現代社会のニーズからすると、かつての筆者の考えとは全く裏腹に、四国遍路にとっては都会から離れていることがプラス要因となり、西国巡礼は大都会に近すぎることがマイナス方向に作用する結果となったのである。

ところで、先の佐藤久光の研究によれば、四国遍路を訪れる人の宗旨は真言宗が48.1%で断然多いのに対し、西国巡礼の場合は35.7%で浄土真宗の門徒が第1位となっている<sup>(註3)</sup>。四国遍路の場合は、真言宗の宗祖弘法大師空海の霊跡をたどる巡礼とされるから真言宗が多いのは当然としても、浄土真宗の場合は、阿弥陀如来だけを信仰対象として、他の仏尊・神祇を認めず、専修念仏を標榜し、一切の物忌をも許さないという教えを持つから、教団やその信仰と西国巡礼の関係はもちろん見出せない。ではなぜそれほどに浄土真宗の門徒たちが多いのかというと、それは西国巡礼に出かける人々の41.4%を大阪府出身者が占め<sup>(註4)</sup>、その大阪府では浄土真宗の檀家が圧倒的に多いというきわめて単純な理由による。

そして、やはり佐藤久光の研究によると、西国巡礼を行う理由として、「信仰心にもとづいて」が25.0%、「信仰心と行楽を兼ねて」が28.3%となっており、平成8・9年段階でも半数以上の人々が何らかの信仰心をもって西国巡礼の旅に出ていることが知られる<sup>(註5)</sup>。

そこで以下、本稿では、速水侑<sup>(註6)</sup>・前田卓<sup>(註7)</sup>・清水谷孝尚<sup>(註8)</sup>・田中智彦<sup>(註9)</sup>ら先学の代表的な研究によって西国巡礼の歴史を概観するとともに、西国巡礼に最も多くの人々を輩出する大阪府下で現在も実際に行われている、西国巡礼にかかわる信仰習俗を紹介し、西国巡礼開創縁起や西国巡礼周辺の事象についての検討などと併せて、西国巡礼に向けられる信仰の内容について考えることとしたい。

## 2. 西国巡礼の歴史

日本の巡礼は、小島博巳がいうように、さまざまな観点から多様な分類が可能であるが<sup>(註10)</sup>、最も代表的な分け方の一つに、宗派の開祖などの霊跡をたどる祖師遺跡巡拝型と、同種の本尊・祭神を祀る寺社を巡る本尊巡拝型の2種にわけける方法があり<sup>(註11)</sup>、真言宗の宗祖弘法大師空海の修行の跡をたどるとされる四国遍路は祖師遺跡巡拝型の代表的事例であり、観音霊場三十三ヶ寺を巡る西国巡礼は本尊巡拝型の代表例である。そして、全国各地にこれを模倣する巡礼を多く産み出したという点でも、四国遍路と西国巡礼はわが国を代表する巡礼となっている。

ところが、「八十八」という数字が具体的に現れ、霊場寺院の固定するのが江戸時代前期に下る四国遍路に対し<sup>(註12)</sup>、西国巡礼の場合、少なくとも11世紀末～12世紀初頭には三十三ヶ所の寺院名が具体的に知られる。

四国遍路の「八十八」という数字は、具体的に何を意味し、何を根拠とする数字か定かではないが<sup>(註13)</sup>、西国巡礼の場合は、『法華経』『善門品』、すなわちいわゆる「観音経」が説くところの「三十三身応現」

利益に基づいて「三十三」という聖数が決まっている。「三十三身応現」とは、観世音菩薩（観音）は衆生を救うために三十三の姿に変じてこの世に現れるという教えである。

さて、西国巡礼が史料的に初めて確認されるのは『寺門高僧記』巻第四「行尊伝」<sup>(註14)</sup>に載せられる「観音霊所三十三所巡礼記」で、そこには「日数百廿日」という記述とともに三十三ヶ所の札所寺院名が記されている。それらを表にし、各札所の現在の寺号や通称を（ ）に補っておいたが、番付こそ現行のそれとは違うものの、三十三ヶ寺の顔ぶれは完全に一致する。

行尊は四十四世天台座主、三十一世園城寺（三井寺）長吏を務めた高僧で、天喜3年（1055）に生まれ、長承4年（1135）に亡くなっており、120日間かけての徒歩巡礼による修行はあまり高齢になってからでは考えにくいので、およそ11世紀末～12世紀初頭頃には現在と同じ顔ぶれの三十三ヶ寺を巡る観音巡礼が成立していたことは間違いない。

次に史料的に確認できるのは、やはり『寺門高僧記』の巻第六「覚忠伝」で<sup>(註15)</sup>、こちらは「応保元年正月、三十三所巡礼。則記之」とあり、覚忠（1118～1177）が44歳の時、応保元年（1161）に三十三ヶ所巡礼を果たしたことが知られる。

三十三ヶ寺の顔ぶれ自体は行尊のときと同じであるが、番付は行尊のときとは違っていて、現行と同じく熊野的那智山が一番札所となっているのが大きな特徴である（表）。

（表） 行尊・覚忠および現行の三十三ヶ所比較

番付	行 尊	覚 忠	現 行
1	長谷寺	那智山	那智山 青岸渡寺
2	龍蓋寺(岡寺)	金剛宝寺(紀三井寺)	紀三井山 金剛宝寺護国院
3	南法華寺(壺阪寺)	粉河寺	風猛山 粉河寺
4	粉河寺	南法華寺(壺阪寺)	槇尾山 施福寺
5	金剛宝寺(紀三井寺)	龍蓋寺(岡寺)	紫雲山 葛井寺
6	如意輪堂(那智山)	長谷寺	壺阪山 南法華寺
7	槇尾寺(施福寺)	南円堂	東光山 岡寺龍蓋寺
8	剛林寺(葛井寺)	施福寺	豊山 長谷寺
9	総持寺	剛林寺(葛井寺)	興福寺 南円堂
10	勝尾寺	総持寺	明星山 三室戸寺
11	仲山寺(中山寺)	勝尾寺	深雪山 上醍醐寺
12	清水寺	仲山寺(中山寺)	岩間山 正法寺
13	法華寺(一乗寺)	清水寺	石光山 石山寺
14	如意輪堂(書写山)	法華寺(一乗寺)	長等山 三井寺
15	成相寺	書写山	新那智山 観音寺
16	松尾寺	成相寺	音羽山 清水寺
17	竹生島	松尾寺	補陀洛山 六波羅蜜寺
18	谷汲寺	竹生島	六角堂 頂法寺
19	観音正寺	谷汲	革堂 行願寺
20	長命寺	観音正寺	西山 善峯寺
21	如意輪(三井寺)	長命寺	菩提山 穴太寺
22	石山寺	三井寺	補陀洛山 総持寺
23	正法寺(岩間寺)	石山寺	応頂山 勝尾寺
24	准胝堂(上醍醐)	岩間寺	紫雲山 中山寺
25	観音堂(今熊野)	上醍醐	御嶽山 清水寺
26	六波羅(六波羅蜜寺)	観音寺(今熊野)	法華山 一乗寺
27	清水寺	六波羅蜜寺	書写山 円教寺
28	六角堂	清水寺	成相山 成相寺
29	行願寺(革堂)	六角堂	青葉山 松尾寺
30	善峯寺	行願寺(革堂)	竹生島 宝蔵寺
31	菩提寺(穴太寺)	善峯寺	姨綺耶山 長命寺
32	南円堂	菩提寺(穴太寺)	織山 観音正寺
33	千手堂(三室戸寺)	御室戸山(三室戸寺)	谷汲山 華蔵寺

那智山が一番札所になった点に関しては、当時隆盛をきわめた熊野信仰との関係が指摘されている。覚忠も、行尊同様、その伝記が『寺門高僧記』に載るように、五十世天台座主、三十六世園城寺長史を務めた天台宗寺門派の高僧であったが、この天台宗寺門派は、寛治4年(1090)に行われた白河上皇の初めての熊野御幸に付き従った増誉(1032~1116、三十九世天台座主)が、その功を賞されて熊野三山検校に補任されて以来、同職を独占しており、熊野は完全に同派の支配下・影響下にあった。熊野三山は同派に属する僧侶たちが参詣に訪れ、修行する聖地となっていたのであり、その延長線上に、熊野・那智山から始まる三十三ヶ所観音巡礼が天台宗寺門派僧侶の修行の一つとして加えられた可能性があるというのである。

さて、三十三ヶ所巡礼の一番札所が熊野の那智山になったのは、熊野信仰が隆盛をきわめた12世紀であったとして、札所番付が現行のそれになり、固定するのはいつ頃かということ、現行と同じ番付の史料的初見は享徳3年(1454)成立の『撮壤集』<sup>(註16)</sup>で、

#### 三十三所巡礼

紀州那智山 紀三井寺 粉河寺 和泉榎尾寺 河内藤井寺 大和坪坂寺 同岡寺 同長谷寺  
同興福寺 山城御室戸 同醍醐 岩間寺 江州石山寺 同三井寺 山城今熊野 同清水寺  
同六波羅蜜寺 同六角堂 同皮堂 善峰寺 丹波穴太寺 摂州総持寺 同勝尾寺 同中山寺  
播州清水 同法華寺 同書写寺 同丹後鳴合寺 若狭松尾寺 江州竹生島 同長命寺 同観音寺  
濃州谷汲寺

と記される。

また明応8年(1499)成立の『天陰語録』<sup>(註17)</sup>にも、「始于南紀那智。終于東濃谷汲」とあるので、15世紀中頃には三十三ヶ所の巡礼が現行の番付として固定していたらしい。

同時期に五山僧として活躍した韜之恵鳳(1414~?)の著した『竹居清事』<sup>(註18)</sup>には「永享上下之交。巡礼之人。道路如織」という記述があるので、永享年間(1429~41)の半ば、1435年前後には都の市街に多くの巡礼者の姿が見えるようになっていた。当初は天台宗寺門派の僧侶の修行ルートであったと思われる三十三ヶ所の観音巡礼が15世紀半ばには都に巡礼者が溢れるほど大衆化し、ちょうどその大衆化と時期を同じくして、札所番付が現行のものとなり、それが固定したという事実が知られるわけである。

ところで、「行尊伝」には「観音霊所三十三所巡礼」とあり、「覚忠伝」では「三十三所巡礼」とあったように、当初この近畿地方一円に展開する三十三ヶ所観音巡礼にはこんにちのような「西国」の文字は冠せられていなかった。

そもそも歴史的にいうと、当時は都が京都だったのであるから、「西国」とは畿内より西の地域を指す用語で、現在の中国地方や九州地方などを示す言葉であったから、畿内およびその周辺に展開する三十三ヶ所巡礼について「西国」を冠することは、当時の一般的用法からすると違和感のある呼び方である。

この三十三ヶ所巡礼に「西国」が冠せられた史料的初見は、文明16年(1484)に陸奥からの巡礼者が納めた巡礼札(納札)で、この頃から「西国」を冠した表現が多く見られるようになっていくので、「西国」という名称の成立も、この巡礼の大衆化、ルートの固定化とほぼ時期が重なるのである。

文明16年の巡礼札が陸奥出身者の納めたものであったように、巡礼札の調査結果によると、どうやらこの時期の巡礼大衆化の担い手は、関東・東北地方、すなわち「東国」の人々だったようで、だから近畿一円に展開するこの巡礼を彼らが「西国」と呼んだらしいのである。

15世紀中~後期の巡礼者の多くが彼ら東国の人々であったとすると、現行の番付に固定した理由も非常に理解し易い。現行の番付は、東国からやって来た巡礼者が伊勢神宮に詣でた後、熊野を訪れ、一番の那智山から順々に三十三ヶ所を巡り、最後の三十三番札所の美濃・谷汲から東国へと戻るのに、大変都合がよいルートになっているのである。

いずれにせよ、15世紀中～後期に、それまでは「三十三所巡礼」としか呼ばなかったものに「西国」の二文字が冠せられて呼ばれるようになり、札所番付が現行のそれに固定し、多くの一般庶民が巡礼に出たという事実には誤りはない。15世紀中後期というと、応仁元年（1467）には有名な応仁の乱が起り、世はまさに戦国時代へと突入する、そのような時期であった。そうした時代に西国巡礼がほぼ現行の形で完成し、巡礼の大衆化が進んだことはたいへん興味深い事実であるといえよう。

### 3. 西国巡礼の信仰

前節では、西国巡礼の歴史を概観したわけであるが、西国巡礼にはこうした史実とは別に、この巡礼の起源を語る次のような物語が伝えられている<sup>(註19)</sup>。

奈良時代の養老年中（717～724）に大和・長谷寺の開山である徳道上人が頓死した。亡くなった徳道上人は冥府へ行き、閻魔大王のもとへと連れて行かれたのであるが、閻魔大王は、日々多くの人々がその生前に犯した罪により、地獄に墮ちて困っていると語る。ついでに閻魔大王が、日本にある霊驗あらたかな観音霊場三十三ヶ所の巡礼を果した者は、その罪障が消滅することとし、地獄には墮とさず、極楽浄土へと往生させると約束するので、この巡礼を庶民に教え広めよと徳道上人に告げ、三十三個の宝印を授けて現世へと蘇らせた。ところが上人の努力にもかかわらず、この三十三ヶ所観音巡礼は当時の人々に受け入れられなかったのだ、あきらめた上人は機を熟するのを待つこととし、摂津国中山寺の「石の唐戸」の中に宝印を納めることとしたのである。

260年余りの時を経た寛和年中（985～987）。ときの帝・花山天皇（968～1008、在位984～986）は藤原為光の娘柅子を弘徽殿に住まわせて寵愛していたが、天皇があまりにも彼女一人を愛し過ぎるので、彼女は他の女性たちから恨みを買う破目となり、嫉妬を一身に受けた柅子は、その精神的な苦痛が原因で、わずか17歳でこの世を去る。愛する女性を失った花山天皇は世の無常を痛切に感じ、即位後わずか3年にもかかわらず宮中を出奔して、京都郊外の山科で出家し、ともに出家・剃髪した二人の公卿とともに熊野へと赴く。熊野本宮で参籠した天皇はそこで熊野権現の託宣を受け、その昔徳道上人が閻魔大王から教えられたという三十三ヶ所観音巡礼の存在を知り、その再興を命ぜられる。河内国石川郡に、経文を読誦するたびに目から光明を放つという仏眼上人を先達として、花山法皇は無事巡礼を果たした。これ以降、多くの人々がこの巡礼を行うようになったのだといい、現在各札所で詠まれる御詠歌も、花山法皇が巡礼の際に詠んだ御製であると伝えられるのである。

西国巡礼の開創縁起はこのように、徳道上人による開創と花山天皇（法皇）による再興という二つの物語で構成され、既に『竹居清事』にこの譚が記されるから、西国巡礼が大衆化し、現在の体裁をほぼ整える15世紀中～後期には既に語られていたことが知られる。

徳道上人の地獄めぐり譚でも明らかなように開創縁起に語られる内容はもとより史実ではないが、一般に寺社の縁起がその寺社に向けられた信仰の内容を知る上でたいへん有効な史料であると同様に<sup>(註20)</sup>、この西国巡礼の開創縁起も、西国巡礼が墮地獄を回避し、極楽往生するための作法であったことを我々に教えてくれる。

ところで、先に第一節で記したように、西国巡礼を行う人が最も多いのは大阪府で、宗旨という面でも大阪府下で圧倒的に強い浄土真宗の門徒の人々が多数を占める。

筆者が生まれ育ち、現在も住んでいる中河内や南河内といった地域もやはり例外ではなく、ほとんどの村落に東・西本願寺いずれかの末寺があり、古くからその村落に住む人たちはそれら末寺の檀家となっている。

そしてこれも既に書いたとおり、浄土真宗は阿弥陀如来を唯一の仏尊として信仰する宗派であり、神祇の存在を否定し、一切の物忌を認めないのであるが、真宗末寺の檀家の人々は、ふだんからそうした宗派の教えを何度となく聞かされ、一方ではその真宗を信仰しつつも、宗派の教えとは矛盾するとも感じずに、さまざまな信仰生活を営んでいる。筆者が住む地域で行われている、あるいは近年まで行われていた主なものを列挙すると、初詣には村の産土社や有名神社に参拝し、3月25日には“菜種御供”といって道明寺天満宮（藤井寺市）に参る。受験の合格祈願をはじめとする学問成就の祈願にもやはり道明寺天満宮に行き、家を新築したり、建て増ししたりする際には大神神社（奈良県桜井市）に参拝する。毎月28日の「お不動さん」には滝谷不動（滝谷不動明王寺、富田林市）、また庚申の日には四天王寺庚申堂（正善院、大阪市天王寺区）に参詣し、女性たちは盛んに淡嶋神社（和歌山市）に参り、妊娠すると中山寺（兵庫県宝塚市）へ腹帯を貰いに行く。子供が生まれると産土社にお宮参り、七五三にも神社に参り、地藏盆には地藏尊の前で盆踊りといった具合で、毎年秋には伊勢大神楽の回檀も受け入れている。

こうした信仰生活は、江戸時代に確立した寺檀制以来の「家の宗教」の外側に置かれるもので、路傍の石仏や道祖神への信仰などとともに「民間信仰」「民俗信仰」といった言葉で表現されることが多いが、筆者は本来教義的には相容れないはずの「家の宗教」とこうした「民間信仰」「民俗信仰」を矛盾するとも感じずにいる信仰生活の総体を「庶民信仰」という概念で捉えることとしている。

西国巡礼も、そうした「庶民信仰」の一つとして、筆者の住む大阪府下では盛んに行われているのであるが、各札所寺院を実際に訪ねる巡礼行為そのもの以外にも、西国巡礼にかかわる信仰習俗がこんにちまで伝えられてきた。

最も代表的なものが、亡くなると、故人が生前に西国巡礼を行った際に三十三ヶ所のご朱印を捺してもらった笈摺や掛軸・朱印帳を、遺体とともに棺の中にいれてやるという習俗である。そうすることで、故人が死後極楽に往生できると信じられているわけであるが、いうまでもなくこれは開創縁起に語られる閻魔王と徳道上人との「約束」に基づく信仰である。そして、棺の中に朱印を捺した笈摺や掛軸・朱印帳を収めるという習俗は、そうした謂れを何ら語らない四国遍路やその他巡礼においても模倣されてゆく。

ところで、筆者は昭和61年に母方の祖母が亡くなるまで、近親者の死に出会うことはなかった。祖母の死によって、初めて人の死にまつわる習俗に出会うこととなったわけである。

母の実家もやはり大阪府の松原市内にあり、真宗大谷派（本山・東本願寺）末寺の檀家であったが、まず驚いたのは本家のおば（母の従兄弟の妻）から、餅を人形に切り、それを持って屋根の上に上り、大棟の中央に置いてくるようにと指示を受けたことである。その人形の餅は、やがて庭に落ちてくるのであるが、それは鳥に突つかれたからで、そのことによって祖母の魂は極楽に往生できるのだ、とおばは説明した。

また檀那寺の住職が枕経をあげに来るが、それよりも先に御詠歌講の人々がやって来て、祖母の遺体の前で西国三十三ヶ所の御詠歌をあげた。こうすることで、生前に西国巡礼を果していない人でも西国巡礼を行ったのと同じ功德を授かることになり、極楽往生がかなうのである。

祖父は真宗の門徒で組織する「同朋の会」の役員を務めるなど、真宗の教えに忠実で、それを実践する生活をおくっていたため、祖母も西国巡礼を行わずに亡くなった。したがって祖母の場合は笈摺や掛軸・朱印帳を棺に収めることはなかったが、一般には出棺の前にそれらを収めてさらに死者の極楽往生を願う。御詠歌をあげ、笈摺や掛軸・朱印帳を収めることで、繰り返し死者の極楽往生を願うのである。

これとは別に真宗寺院の僧侶によって読経が行われ、葬儀が執行されるのであるが、それぞれが全く別個にあるのではなく、一連の葬送儀礼の流れの中で両者は複合的に行われる。真宗地帯の大阪府下では、葬送儀礼において、西国巡礼にかかわる習俗がきわめて大きな位置を占めるのである。

#### 4. 西国巡礼の周辺

前節の最後で、死者の遺体の前で御詠歌講の人々によって西国三十三ヶ所の御詠歌があげられ、死者に西国巡礼を擬似体験させ、死者を極楽往生させるという習俗があることを記したが、実は三十三ヶ所の御詠歌をあげ終わった後で、あわせて信濃・善光寺の御詠歌もあげられる。

現在、西国巡礼の札所会が公式に「番外札所」として認定しているのは奈良県桜井市の法起院と京都市山科区の元慶寺、兵庫県三田市の花山院の三ヶ寺である。

法起院は徳道上人の墓所とされる寺院で、元慶寺は花山天皇が出家した寺院、花山院は花山天皇（法皇）の墓所とされる。要するに三ヶ寺とも西国巡礼開創縁起にかかわる寺院であるが、実際に巡礼者用に販売されている掛軸や朱印帳には三十三ヶ寺とこれら番外寺院の他に、高野山奥の院、四天王寺、東大寺二月堂、善光寺などの欄が用意されているものが多く、寺院の側でも西国巡礼者向けに朱印を授けており、たいいていの巡礼者はそれらのいくつかを訪れ、ご朱印を捺してもらっている。筆者はこれらの寺院を札所会が公認する番外札所に対して、「歴史的番外札所」と呼んでいるが<sup>(註21)</sup>、とりわけ大阪府下では、「西国巡礼に出かける前には四天王寺さんへ挨拶に行き、三十三ヶ所を巡礼し終わったら善光寺さんへ御礼に行かねばならない」といわれ、「歴史的番外札所」の中でも四天王寺と善光寺が特別な位置にある。ちなみに、四国遍路に関しても、大阪では、四天王寺と北区の太融寺、福島区の光智院にまず参拝してから旅立つのを例としたと伝えられる<sup>(註22)</sup>。

さて、江戸時代の西国巡礼については、たとえば関東・東北といった東国からの場合、伊勢参宮旅行と一体化し、まず伊勢参宮を終えてから、紀伊半島を南下して熊野に至り、一番那智山から順々に西国三十三ヶ所の札所を巡り、途中には奈良や大阪・京都の名所見物・市中見物もして、三十三番谷汲山を終えた後は、善光寺に参拝して、故郷に帰るというのが一般的なルートであったことが明らかになっており、1800年前後から、これに金毘羅参詣が加わり、さらに安芸の宮島や岩国の錦帯橋にまで足を伸ばすようになった<sup>(註23)</sup>。したがって江戸時代の巡礼者は、実際に高野山奥の院、四天王寺、東大寺二月堂、善光寺にも参拝していたことが知られるわけであるが、彼らはその他にもさまざまな名利・霊場にも立ち寄り、江戸時代の巡礼者たちが訪れたからといって、それだけの理由で直ちに「歴史的番外札所」になったのではない。そこに西国巡礼と共通の信仰があったからこそ、それらの寺院が西国巡礼と一体化することになったのである。

たとえば四天王寺の場合、同寺は平安時代以降、浄土信仰の聖地として衆庶の信仰を集めるようになった。当時は境内の西側近くまで海が迫っていたため、海を真っ赤に染めて沈んでゆく夕陽を眺めて西方遙か彼方の極楽浄土を想う「日想観」という修行が盛んに行われ、四天王寺西門の石鳥居が「極楽の東門」として信仰対象にもなったが、次第に海が遠のいたこともあって、四天王寺の伽藍そのものが極楽浄土として信仰されるようになる<sup>(註24)</sup>。四天王寺伽藍の地下には青龍池と呼ばれる池があるといわれ、その水は極楽浄土へと通じていて、境内の「亀井」の水はその青龍池から流れ出ているので、亡くなった人の戒名を経木に書いて亀井に流してやるとその人の魂は亀井から青龍池を通して極楽にたどり着くといわれ、現在も亀井で経木流しを行う人の姿は日々絶えることがない<sup>(註25)</sup>。また北鐘堂は一般に「引導の鐘」と呼ばれ、その鐘の音は極楽にまで響くといわれ、江戸時代には、西門の石鳥居脇にある「引導石」の上に棺を置いてこの鐘を鳴らすと、僧侶の力を借りることなく、死者を極楽往生させることができると信仰されたのである<sup>(註26)</sup>。

四天王寺同様、善光寺についても、やはり「墮地獄回避」「極楽往生」の信仰を集めることで知られる。

善光寺の本尊・善光寺如来は、飛鳥時代に百済の聖明王から欽明天皇のもとに贈られたがわ国最初の仏像と伝えられ、蘇我氏vs物部氏のいわゆる崇仏論争の過程で、排仏派の物部守屋によって難波の堀江に投げ棄てられたという。崇仏派の蘇我氏が勝利したのち、聖徳太子が難波の堀江に如来を迎えに行ったが、如来は

心中期するところがあるので時機を待てと告げるのみで姿を現すことはなかった。それからしばらくの時を経て、信濃国から都に出仕していた本田善光という人が任期を終えて帰国するにあたり、難波見物をしていたところ、突然水底から光輝く仏像が飛び出して来て善光の肩に取りつき、善光の故郷信濃へ連れて行くように託宣した。善光は言われるがままに如来を背負って帰郷し、信州伊那の自宅の白の上に安置したが、そのうちに善光の夢に如来が現れ、水内郡芋井郷に移りたいと告げたため、善光とその家族はお告げに従って移り住み、如来のために小さなお堂を建てた。これが現在の信濃善光寺の始まりだというのである。

善光が水内郡に如来を遷した翌年、善光の一人息子である善佐が不幸にも頓死する。親より先に死んだ善佐の不幸を嘆いた善光が、如来に何とかならないものかとお願ひしたところ、如来はわざわざ閻魔大王のところまで出向いてくれ、善佐をこの世に蘇らせる約束を取り付けてくれた。ところが当の善佐が、折角地獄に堕ちたのだから、この機会に地獄を見物したいと閻魔大王に頼み込み、鬼を案内役につけてもらう。そこで善佐は地獄に堕ちて苦しむ皇極女帝の姿を見た。蘇生した善佐からその話を聞いた善光が、あまりにも哀れなので、何とか天皇を地獄から救って欲しいと如来に頼んだところ、再び如来は閻魔大王と交渉して、皇極天皇をも蘇生させた。生き返った女帝は重祚して斉明天皇となり、善光・善佐に深く感謝して、善光を甲斐守、善佐を信濃守に任ずることで報い、如来のためにはりっぱな御堂を造営したのだという。

善光寺の縁起に語られるこの物語には、善光寺の本尊・善光寺如来が地獄に堕ちた人々を救い、この世に蘇らせるほどの強い仏力を備えていることが示されている。

善光寺の本堂地下には「戒壇」と呼ばれる真暗闇の通路が設けられていて、現在でも善光寺に詣でた人々のほとんどがこの「戒壇巡り」を行う。真暗闇の通路はすなわち地獄を意味していて、その通路を歩いてゆくと、途中で鍵にさわることとなる。この鍵は善光寺如来の指先と糸で結ばれていて、鍵に触れることは、すなわち善光寺如来と結縁したことを意味する。そして人々は再び本堂へと戻ってくるのであるが、これは縁起に語られた善佐の地獄巡りを擬似体験するための装置であり、これを行うことは、すなわち宗教民俗学でいうところの「擬死再生儀礼」を実修したことになる。善光寺に参詣した人々は、「戒壇巡り」を行なうことで、一旦地獄に堕ち、善光寺如来と結縁することで再びこの世に蘇るという体験をするわけである<sup>(註27)</sup>。

また善光寺には「御印文」という宝印が伝えられていて、毎年1月7日から15日まで、「御印文頂戴」という儀式が行われている。錦の袋に入ったままの御印文を額に擦してもらうという儀式で、これを頂くと極楽往生ができると信仰され、江戸時代の出開帳では盛んにこの儀式が行われ、出開帳の収入の半分がこの「御印文頂戴」によるものであったというから<sup>(註28)</sup>、どれほどの信仰を集めたかがうかがわれる。

江戸落語にはそのまま「御印文」という題名の噺も伝わっている。地獄の鬼たちが、近頃は地極に堕ちてくる亡者の数が少なくなり、商売があがったりで、不景気で仕方がないと嘆くのであるが、調べてみると、信濃国の善光寺に「御印文」というものがあって、人々が皆それを擦してもらい、極楽に往生しているからだ、原因が明らかになる。それで鬼たちが語らいあい、善光寺に忍び込んで、宝庫にしまっている「御印文」を盗み出そうとするのであるが、無事に在りかを見つけたところまではよかったものの、皆で運び出そうと鬼たちが御印文に手をかけた途端、彼ら全員が極楽往生してしまったということで、噺に落ちがつく<sup>(註29)</sup>。

落語の題材となるほど善光寺の「御印文」はそれほど有名だったわけで、「墮地獄回避」「極楽往生」を願う多くの人々が善光寺に参拝した。善光寺の「御印文」は閻魔大王の種字(梵字)が刻まれた判で、地獄に堕ちた亡者を釈放して、極楽へと送る証として信仰された。閻魔大王から徳道上人が授かったという西国巡礼三十三ヶ所の宝印と同じ性格を持つものである。

西国巡礼を果たしたことの功德は、巡礼者たちの体験談として現在もさまざまに語られ、各札所に参拝する



ことによって得られる靈驗も、寺院によって喧伝される。また、現代の西国巡礼者が持つという「信仰心」も、その内実は多種多様であろうが、開創縁起に示されたように「墮地獄回避」「極楽往生」こそが、中世後期に大衆化して以降の西国巡礼を貫く最も本質的な信仰であった。だからこそ、同質の信仰を共有する四天王寺・善光寺などが「歴史的番外札所」として西国巡礼と結びついたのであり、葬送儀礼においても、檀那寺の住職が執り行なう葬儀とあわせて、御詠歌講の人々によって西国三十三ヶ所の御詠歌があげられ、棺に笈摺や掛軸・朱印帳などが収められるのである。檀那寺の住職による読経だけでなく、西国三十三ヶ所の御詠歌をあげ、笈摺や掛軸・朱印帳を遺体とともに納棺することで繰り返し繰り返し故人の極楽往生を願い、善光寺の御詠歌をあげることで、さらに極楽往生を願ったのである。庶民信仰としての西国巡礼の本質は、地獄に墮ちる人々の救済にこそ求められるのである。

## 註

- (1) この点については、北川央「真念庵を訪ねて～随想・四国遍路～」(季刊『仏教通』6号、2003年)でも既に触れている。
- (2) 佐藤久光『遍路と巡礼の社会学』第3章「現代の巡礼・遍路の動向」(人文書院、2004年)
- (3) 註(2)に同じ。データは平成8年から9年にかけてのもの。
- (4) 註(2)に同じ。データはやはり平成8年から9年にかけてのもの。ちなみに四国遍路の場合は、愛媛・香川・徳島・高知の順に四国四県出身者が1～4位を占め、四県出身者の占める割合は、49%にも達する。
- (5) 註(2)に同じ。ちなみに四国遍路の場合は、「信仰心にもとづいて」が35.4%、「信仰と行楽と兼ねて」が26.5%で、西国巡礼以上に信仰心を持って巡礼する人々の割合が多くなっている。
- (6) 西国巡礼に関する最も代表的な著作として、『観音信仰』(塙書房、1970年)が挙げられる。
- (7) 代表的な著作に『巡礼の社会学 西国巡礼・四国遍路』(ミネルヴァ書房、1971年)がある。
- (8) 代表的な著作に、『観音巡礼のすすめ—その祈りの歴史—』(朱鷺書房、1983年)、『巡礼と御詠歌〔観音信仰へのひとつの道標〕』(朱鷺書房、1992年)がある。
- (9) 代表的な著作に『聖地を巡る人と道』(岩田書院、2004年)、『西国三十三ヶ所巡礼』(共著、新潮社、1988年)がある。
- (10) 小嶋博巳「遍路と巡礼」(四国遍路と世界の巡礼研究会編『四国遍路と世界の巡礼』所収、法蔵館、2007年)
- (11) 真野俊和編の『講座 日本の巡礼』では第1巻を『本尊巡礼』(雄山閣出版、1996年)、第2巻を『聖蹟巡礼』(雄山閣出版、1996年)にあてているが、ここでいう「本尊巡礼」が本尊巡拝型、「聖蹟巡礼」が祖師遺跡巡拝型に相当する。
- (12) 内田九州男「四国八十八ヶ所の成立時期」(『四国遍路と世界の巡礼』所収、前掲)
- (13) 四国遍路の「八十八」という数字に関する諸説は、佐藤久光『遍路と巡礼の社会学』第1章「研究の課題と各霊場の成立」で紹介されているので、参照されたい。
- (14) 『続群書類従』第28輯上
- (15) 註(14)に同じ。
- (16) 『続群書類従』第30輯下
- (17) 『続群書類従』第13輯上
- (18) 『続群書類従』第12輯上
- (19) 『観音霊場記』(享保11年=1726年刊)、『西国三十三所観音霊場記図会』(享和3年=1803年刊)他。
- (20) 北川央「方広寺大仏殿に祀られた善光寺如来」(『観光の大阪』458号・459号、1989年)
- (21) 北川央「近世大坂周辺地域における金毘羅信仰の展開」(『歴史の道調査報告書 第7集 宗教の路・舟の路』所収、大阪府教育委員会、1991年)、北川央「江戸時代の旅と大坂—西国順礼道中記を読む—」

(『四天王寺』705号、2005年)

- (22) 『日本歴史地名体系28 大阪府の地名I』の「上福島村」の項。
- (23) 小野寺淳「旅のモデルルート 道中日記から」(『週刊朝日百科 日本の歴史』75号、1987年)、小野寺淳「道中日記に見る伊勢参宮ルートの変遷—関東地方からの場合—」(『人文地理学研究』XIV、1990年)
- (24) 北川央「浄土信仰の聖地—四天王寺、そして遥かなる熊野」(『大阪人』58巻9号、2004年)、北川央編著『おおさか図像学—近世の庶民生活』(東方出版、2005年)
- (25) 北川央・有栖川有栖「<対談>上町台地の海と水を語る」(『～歴史の魅力あふれる大阪のふるさと～上町台地を歩く』所収、読売新聞大阪本社、2007年)
- (26) 北川央・木村真弓「<サウンドトリップ対談>歴史を聴く、文化を聴く、生活を聴く 上町台地の音」(『歴史と伝統の舞台 上町台地を歩く』所収、読売新聞大阪本社、2008年)
- (27) 五来重『善光寺まいり』(平凡社、1988年)、北川央「方広寺大仏殿に祀られた善光寺如来」(前掲)
- (28) 小林計一郎『善光寺さん』(銀河書房、1973年)
- (29) 五来重「庶民の寺・善光寺」(『昭和大修理勳進 善光寺展』図録所収、共同通信社、1987年)



大阪市立美術館編『西国三十三所観音霊場の美術』より